

伝え合う楽しさを共有する国語科学習 ～ペアでの紹介活動を位置付けた学習過程～

Language arts learning to share the pleasure to tell each other
～ Learning process, which position the placement activities of a pair ～

大久保 良 博

Yoshihiro OKUBO

(福岡教育大学附属福岡小学校)

(平成25年9月30日受理)

要 約

これからの国語科では、様々な立場に立って自分なりに思い描いた考えを他者に提示したり、相手の考えの根拠に思いを巡らしたりしながら、他者と読みを伝え合うための対話力を身に付けた子どもを育てることが大切である。本研究では、伝え合う楽しさをペアやグループで共有する子どもの姿をめざして、昔話のとおきをおきをおき他者と伝え合う学習の実践を行った。自分たちが見つけた昔話のとおきをおきを、どのようにして他者にわかりやすく伝えるかを、ペアの友達と考えを出し合ったり、伝え方を話し合ったりして、自分たちの「昔話のとおき」を生き生きと伝えあう姿が見えてきた。

キーワード：伝え合う楽しさ、国語科学習、昔話、ペア、紹介活動、とおき

I はじめに

都市化、情報化、少子高齢化などの社会変化は、様々な立場の人々との円滑なコミュニケーションを困難にしている。都市化に伴って増加した隣人や見知らぬ人との意思疎通、情報化による情報機器を介しての間接的な意思疎通、少子高齢化により変容した異なる世代との意思疎通など、人間関係の希薄化ゆえに、立場の異なる人を尊重しながら、コミュニケーションを図ることが重要である。これからの学校教育においては、集団の中で自分の意見をわかりやすく整理して的確に伝える発信力や相手が話しやすい環境をつくり、適切な質問で相手の意見を引き出す傾聴力をはじめ、柔軟性や状況把握力を備えた「開かれた個」を育てることが求められる。国語科はその中心を担う教科として、学び合う集団づくりの土台となる対話力の育成をリードしていく大切な使命がある。

これまでの学校教育では、先進的な知識の吸収に偏っていたり、進学や入試を目的とした知識志向が強かったりしたため、互いに知識を共有したり、そこから新しいものを生み出したりするという機会は少なかった。これからの国語科では、個の読みの創造から、他者と関係を結び、読みを共有しながら他者と協働して読みを深める学習が大切になる。様々な立場に立って自分なりに思い描いた考えを他者に提示したり、相手の考えの根拠に思いを巡らしたりしながら、「開かれた個」として他者と読みを伝え合うための対話力を

身に付けた子どもを育てることこそが、今後の国語科学習において望まれる。

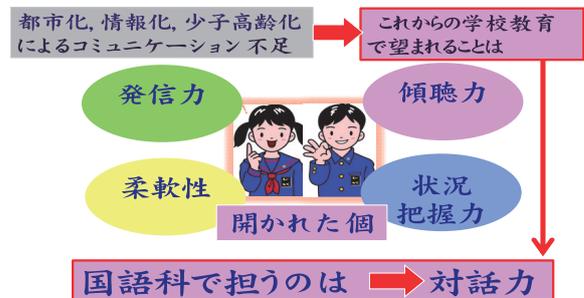


図1 これからの国語科でめざす姿

II 研究主題の説明

1 伝え合う楽しさ

伝え合う楽しさとは、自分も持っている知識や技能を駆使して自分の思いや考えを相手に伝えようと努力し、それらが伝わったときに味わう喜びや感動である。伝え合う楽しさを味わわせるためには、子どもの課題意識を大切に動機付けの工夫と人とのかかわる活動とが相互に作用し合うことが必要である。

2 伝え合う楽しさを共有する

伝え合う楽しさを共有するとは、自分と他者とが互いの思いや考えを相手に伝えるために、伝え方を工夫したり評価したりしながら、伝わったときに湧き上が

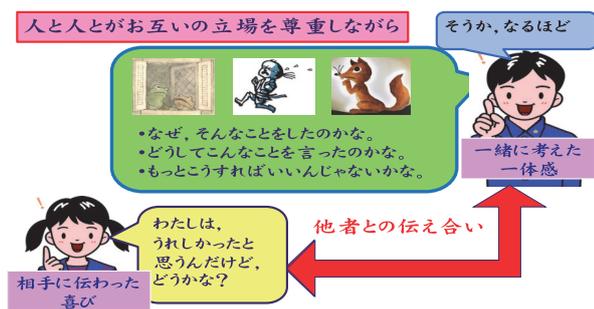


図2 伝え合う楽しさとは

る喜びや感動とともに味わうことである。共有する楽しさは、自分の発見や考えと他者の発見や考えとに、共通点や相違点を見出したときに生まれると考える。

3 伝え合う楽しさを共有する国語科学習

伝え合う楽しさを共有する国語科学習とは、個で創造した読みや考えを他者に発信したり、他者の読みや考えを受信したりする双方向的な言語活動において、両者の読みの共通点や相違点を見出すことで、自分の読みの確かさを感じたり、それまで気付かなかった新たな読みを創造したりして達成感や満足感を味わう学習のことである。伝え合う楽しさを共有する学習においては、よりよく読むための方法を出し合ったり、表現するために自分たちのイメージを突き合わせたりしながら、表現や読みの課題を解決していく姿をめざすべきである。そこで、伝え合う楽しさを共有する国語科学習では、国語科の特質である「読む能力」を中核にした「豊かな学力」と、「対話力」を中核とした「人と働く力」の両面からめざす子どもの姿を設定する。

めざす子どもの姿

【豊かな学力】

- 人物の行動や会話、優れた叙述に着目し、想像を広げて読むことができる。(読む能力)
- 古典を読んだり紹介したりして、伝統的な言語文化に触れることの楽しさや昔の人のものの見方や考え方を味わうことができる。(伝統的な言語文化に関する事項)
- 進んで昔話を見つけたり紹介したりして読書を楽しむことができる。(関心・意欲・態度)

【人と働く力】

- ◎ 読みの課題の解決に向けて、自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら、考えを一つにまとめたり、よりよい考えを創り出したりすることができる。(対話力)

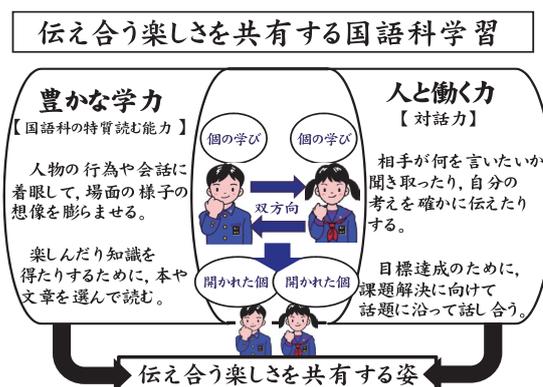


図3 伝え合う楽しさを共有する姿

III 研究副主題の説明

1 ペアでの紹介活動

ペアでの紹介活動とは、子どもたちが、文章を読み、興味を感じたり、伝えたいと思ったりしたことを、ペアの友達や他のペアと紹介し合い、互いに読書への関心を高めていく学習のことである。低学年国語科では、「読んだ本について好きなところを紹介し合う」言語活動を通して読書を楽しんだり、「昔話や神話・伝承などの本や文章を聞いたり発表し合ったり」する指導事項がある。我が国の伝統的な言語文化である昔話や神話・伝承を読み、自分たちで見つけたお話のおもしろさを友達に紹介することによって、自分たちのお話に対する思いを深める言語活動である。紹介し合うことを通して、自らの読書生活を豊かにするとともに、昔話や神話・伝承を読みたい気持ちを友達と共有して読書の輪を広げていくことができると考える。

2 ペアでの紹介活動を位置付けた学習過程

ペアでの紹介活動を位置付けた学習過程とは、お話を読んで伝えたいと感じた発見やおもしろいと感じた独特な表現を、同じお話を読んだ友達と伝え合って共有し、他者によりよく伝える内容や方法について話し合いながら、自分たちの「とっておき」を創り上げていく過程のことである。この過程は、「伝えたい対象に出会い追究する学習課題に気づく段階」「伝えたいとっておきをペアの友達とつくる段階」「伝えたいとっておきを発信し、自分たちの学習の成果をあげよう段階」の3つの段階で構成される。そのために、チームの活かし方や明確な目標設定、チームワーク、シンキングツールなどを取り入れた学習過程を工夫する。

IV 研究の構想

1 チームの活かし方の工夫

伝え合う楽しさを共有する国語科学習においては、個やペアによる読みの創造、他のペアとの磨き合い、学級全体での交流といった目的や段階に応じたチームによる学習が必要である。具体的には以下の表の通りである。

表1 チームの考え方

チーム形態	チームの構成員
	チームの機能
ペア	同じお話を選んで読んだ友達 伝える内容や方法を創り上げる 想像・創作機能
ペア間	同じテーマを選んで読んだ友達 ペアで創ったものを伝え合い磨き合う 評価機能
学級全体	同じ追究課題を解決する友達 読みの課題の設定や解決を行う 課題解決機能



2 チームワークの位置付けを工夫した活動構成

紹介する対象に応じてソロとチームワークを組み合わせる活動構成の工夫を行う。単元の導入段階では、お話の「とっておき」を個で発見し紹介し合うので、ソロからチームワーク1へとつなぐ活動構成になる。学級の友達や保護者等に紹介する展開段階では、紹介する「とっておき」を見合うチームワーク2と協力して紹介するチームワーク3を組み合わせた活動構成となる。

3 わかりやすく魅力的な目標の設定

昔話や神話・伝承のおもしろいところを紹介し合い互いに読書への関心を高めるための学習では、「読んでみたい」という気持ちになった友達の直接的な評価

が有効である。ペアの友達、学級の友達、隣の学級の友達と紹介する対象を広げながら、おもしろいと感じた気持ちを伝える「読みたいシール」を集めていくのである。「今日は友達からいくつシールをもらうかな」という獲得目標を設定することで、発見したとおきのおもしろさを伝える意欲を高めるという「適度な困難さ」を含んだ目標となる。集めた「読みたいシール」の数は、紹介した昔話を読んでみたくなった友達が増えたことを示すので、「測定しやすさ」を満たした目標である。また、おもしろいところをどのような方法や順序でいくつ紹介できるのか見通しをもたせることで、「近づきやすさ」のある目標にしていくことができる。

V 指導の実際

1 単元名

第1学年

みつけよう、つたえよう、おはなしの とっておき
～むかしばなしが いっぱい～

2 本単元の目標

- 登場人物の言動に着眼してあらすじを読み取り、好きな場面を中心に創造を広げながら読むことができる。(読む能力)
- 昔話の読み聞かせを聞いたり読んだりして見つけたとっておきのおもしろさを紹介することができる。(伝統的な言語文化に関する事項)
- 進んで昔話を見つけたり紹介したりして伝統的な言語文化に触れ、読書を楽しむことができる。(関心・意欲・態度)
- 友達と話し合いながら、お話紹介をつくることができる。(対話力)

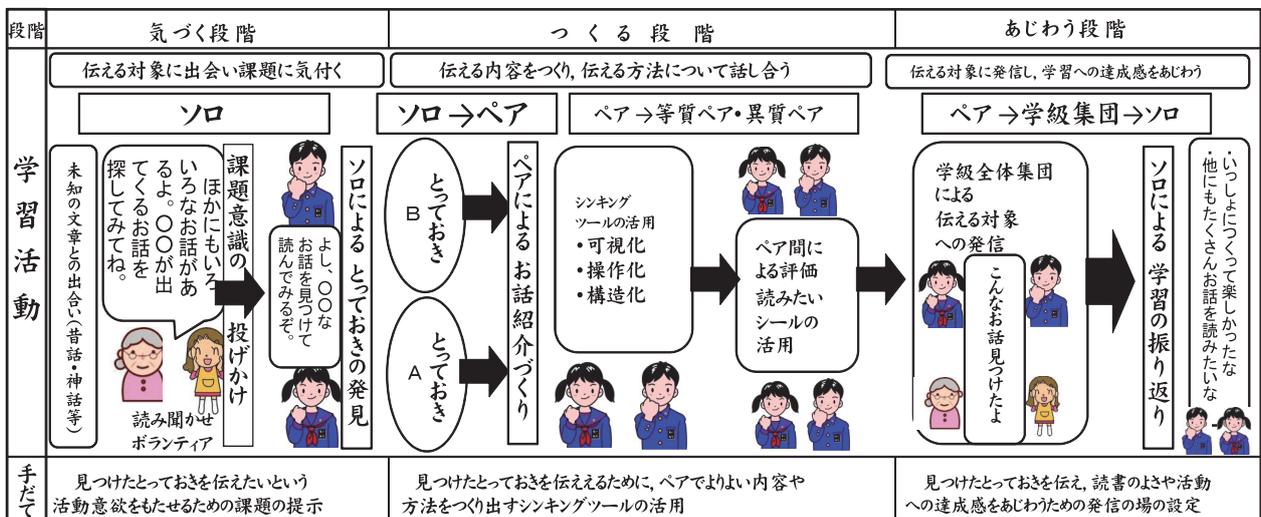


図4 ペアでの紹介活動を位置付けた活動構成の工夫

3 本単元の構成

本単元では、昔話などのお話の読み聞かせしてもらったり、自分たちでも選んで読んだりしながら、同じ話を読んだ子ども同士でペアを組んで、読み聞かせしてくれたお母さんたちに紹介する学習を設定する。導入段階では、読み聞かせボランティアを募り、「1の1お話し会」を開く。この活動により子どもたちの中に、昔話に対する興味や読み聞かせに取り組んでみたいという意欲をもたせる。展開段階では、「ほくたち・わたしたちが見つけたお話のおもしろさを伝えよう」という課題意識のもと、ペアに分かれてお話を読み、お話のおもしろさの伝え方を学びながら「1の1のおはなしおんがえし」に向けた活動を行う。発展段階では、ペアで考えて練習してきたお話を読んで聞かせたり、発見したおもしろさを伝えたりして「1の1のおはなしおんがえし」を行う。



図5 本単元の構成

4 指導の実際と考察

気づく段階：1～3 / 10時

おうちの方の読み聞かせを聞いたり、お話をみつけて読んだりして、学習の見通しについて話し合う。

気づく段階では、昔話や神話などのお話に出合わせて、お話の楽しさに触れたり、自分もお話をさがして読みたいという意欲を高めたりすることをねらいとしている。そのために、まず、学級の保護者に読み聞かせのボランティアを募り、子どもたちに4つのお話の読み聞かせを行う機会を設定した。お話はそれぞれ、「かちかち山」「鶴の恩返し」「ももたろう」「一休さん」である。読み聞かせの終わりに読み手であるお母さん方から、「他にも〇〇が出てくるお話があったら教えてください。」という課題を話してもらい、子どもたちに今後の学習に対する課題意識をもたせた。また、次の時間には、4つのテーマに関連したお話10編を含む昔話コーナーを教室に設置し、自由によむ活動を仕組んだ。A児は写真1のように「うさぎ」が出てくるお話「うさぎの商売」を見つけて読み、お話のあら

すじをつかむとともに、聞いたお話と大きく違う点に気づき、見つけたお話に関心を高めた。



わたしは、「かちかち山」のおはなしをよんでもらいました。とてもやさしいうさぎが出てきて、おばあさんのかたきをとってあげました。ほかにも「うさぎ」が出てくるのがあったら、よんでみたいです。

写真1 読み聞かせのお話と似たお話を見つけて読むA児

(考察1)

子どもたちに今後の学習への課題意識をもたせる上で、読み聞かせボランティアを募りお話し会を開いたことが有効であったと考える。それは、写真1の自分もお話を見つけて読んでみたいというA児の感想や、2つのお話を比べて「悪いうさぎもいる」という違いに気づきお話に興味をもった姿から判断することができる。

つくる段階：4～7 / 10時

ペアの友達とお話の「とっておき」を伝え合い、おうちの方たちに紹介するためのプランをつくる。

つくる段階では、同じテーマのお話を見つけて読んで友達とペアを組み、おうちの方たちに紹介する「1の1おはなしおんがえし会」を開くために、お話紹介をつくることをねらいとしている。そのために、ペアでお互いが見つけた「とっておき」を出し合ったり、一緒に紹介の練習をしたりする活動を設定した。その際、とっておきのおもしろさが伝わる紹介にすると、この内的動機がペアで共有化できるために、また1年生という発達段階を考慮して、「よみたいシール」という評価機能を用いた目標設定を行った。シンキングツールとして、見つけた「とっておき」をどんな順番でどのように紹介するかを選択・決定するための紹

介プランを活用させた。また、紹介プランを付加修正するための材料として、紹介モデルの提示を行った。



A児：〇〇さんたちは、一番好きなうさぎの紹介をしていたね。
B児：ぼくたちも、ずるがしこいうさぎっていうことにしよう。
A児：どこに入れる。
B児：音読の前がいい。こんなうさぎを見つけたって言おう。

写真2 モデルを見て自分たちの紹介を見直すA児ペア



A児：最後に、どんなうさぎかというのを入れたほうがいいよ。
B児：そうだね。「かちかち山」と違って、悪いうさぎってことを入れたらおもしろいかもね。
A児：じゃあ、ここに（紹介の言葉を）書くな。
写真3 読みたいシール獲得のために紹介プランを見直す姿

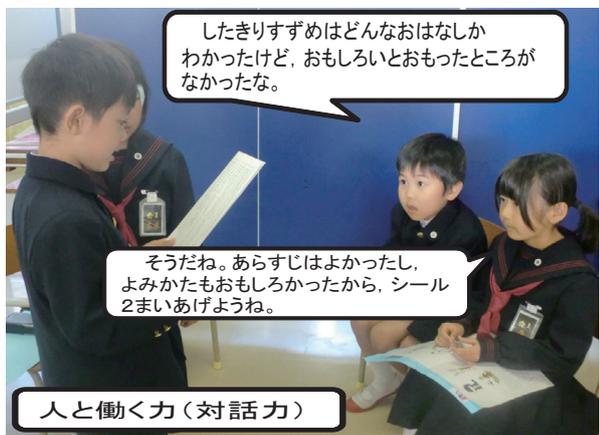


写真4 他チームと評価し合う姿



写真5 役割分担して音読をしようとするペアの姿

資料1 学習前後のA児ペアの紹介プランの比較

うさぎのしょうばい(学習前)	うさぎのしょうばい(学習後)
あらすじ わるいうさぎが出てくるおもしろいおはなしです。 わたしたちが好きなばめんは、うさぎが、みんなをだましておかねを手に入れるところ。うさぎがみんなをだますのがおもしろい。 うさぎがお金を手に入れるところ	うさぎのしょうばい(学習後) あらすじ ずるがしこいうさぎがちなしです。 わたしたちのばめんのとっておきは、うさぎがとつてもわるいこと。あたまはいいんだけどかちかち山とちがつて、とてもずるがしこいところ。おすすめで。 うさぎがにわとりをだますところ

(考察2)

読み聞かせてもらったお話と見つけたお話の違いを読み取り、お話紹介をつくるという「読む能力」を高める上で、「読みたいシール」による目標設定を行ったこと、紹介プランを活用したことは有効であったと考える。それは、お話のおもしろさがよりよく伝わるために、とっておきを付け加えようとお話を読み直したり、紹介プランに取り入れたりしようとしている姿からうかがえる。また、同じお話を読んでも、お互いにおもしろいと感じるところが違うことに気付いたり、自分では気付かなかったお話のおもしろさに気付いたりしながら(写真3)いっしょにお話を紹介しようとする姿(写真4～5)から、言語に関する知識・理解・技能や人と働く力の中の対話力が高まったことをうかがうことができる。

あじわう段階：8～10 / 10時

おうちの方たちにお話の恩返しをする「1の1おはなしおんがえし会」を行う。

あじわう段階では、子どもたちが、おうちの方に見付けたお話のとおきを紹介するという単元を貫く課題を解決することをねらいとしている。そのために、読み聞かせをしてくれたボランティアの方を始め、すべての保護者に、お話のとおきを伝える機会を設

定した。子どもたちが2つのペアで協力して、つくってきたお話紹介プランをもとに、とっておきのおもしろさを伝える姿が見られた。

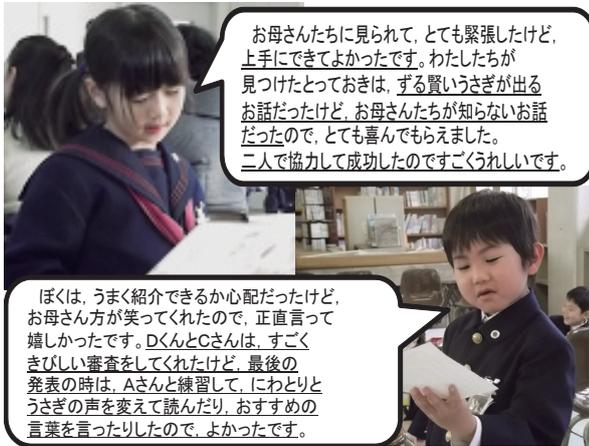


写真6 学習後のA児ペアの感想

(考察3)

昔話のおもしろさや独特の語り口調や表現に気付き、それらのよさを味わいながら伝統的な言語文化に親しむという豊かな学力を育む上で、「おはなしおんがえしかい」が有効であったと考える。これは、紹介プランを作成し、ペアで練習したり、他のペアと互いの紹介を見合って評価したりしながらチームでの学びを積み上げてきたことが有効に働いたからである。写真6に見られるようにおはなしおんがえしかいを位置付けることによって、友達との協力で成功したことを喜ぶ達成感や、自分たちの学習の成果が相手に伝わった成就感を味わう姿が見られた(関・意・態、人と働く力)。

VI 全体考察

考察1と考察2からわかるようにお話のとっておきを伝えたいという課題意識をもって進んでお話紹介をつくらうとする姿が見られた(関心・意欲・態度、知識・理解・技能)。また、考察3から、ペアやチームの友達と協力してお話紹介をする姿やともに達成感を味わう姿から人と働く力が高まったととらえることができ

る。これは、ペアで紹介プランをつくり、他のペアとチームを組んで互いの紹介を見合う活動が有効だったからであると考えられる。単元前と比較すると、学級全体として資料2からわかるように、友達とお話を讀んだり表現したりすることに興味をもち、人と働く力の高まりが見られた。このことから、ペアでの紹介活動を位置付けた学習過程が有効に働き、伝え合う楽しさを共有する子どもが育ったと言える。

VII 成果と課題

○チームの活かし方

ペアや、ペア間での活動が、自分たちの読みを出し合い、進んでお話紹介をつくらうとする姿につながった。

○学習過程の工夫

紹介プランの活用や読みたいシールによる評価活動が有効に働いた。

●課題

「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の領域におけるペアでの紹介活動の開発。

参考文献

- 1) 小学校学習指導要領解説・国語編
文部科学省 平成20年
- 2) 井上一郎 読む力の基礎・基本
明治図書 2003年

資料2 人と働く力の変容

